

チームクラフト

製品とともに届けたい、この想い

こだわりに寄り添う如雨露づくり 根岸産業株式会社(堤通一丁目)



根岸洋一社長

バケツづくりから始まった 根岸産業の足跡



大きい如雨露は1日で4個ほどしか作れないそう。

根岸産業は1944年創業。神社などの修理を行っていた根岸社長のおじいさんが、空襲で「がれき」となった町からトタンなどの廃材を集め、バケツをはじめとした生活用品を作ることから始まったそうです。

その後、イギリスから伝わった如雨露も手がけるようになります。しかし、トタン製の如雨露はほかの会社でも作っていたため、根岸産業では「銅などの素材や質にこだわる如雨露づくり」へ転換。現在では、一般の方だけでなく、盆栽や植栽を専門に手掛ける方々からも長く愛される製品となっています。



昨年から弟子として働く長谷川さん。

軽量化を進めて

根岸産業の如雨露の特徴の1つは、軽さです。水を入れると重くなるため、如雨露自体はできるだけ軽くしています。海外の老舗如雨露メーカーと比べ、2/3の重さだそうです。

雨を降らせる如雨露

「如雨露」の字のとおり、雨が降り注ぐように水やりができる、根岸産業の如雨露。そのために、注ぎ口の穴の数や大きさ、柄の長さなどを研究したそうです。使った方からも「雨に近い如雨露だ」と言われて嬉しかったとおっしゃっていました。

エスディーエス SDGs は時を越えて

如雨露は複数の部品をはんだ付けをして組み立てます。壊れた時には、その部品だけを交換すればいいからです。昔のものづくりは、手入れをしながら長く使うことが考えられています。現在世界で取り組まれているSDGsの考え方と、つながる所がありますね。



280度で溶かしたはんだで素早く部品をつなぎます。とても暑い中での作業です。

ライバルは 昨日の自分

視野を広げて、第三者からの評価も得ようと、コンテストなどにも製品を出品しているそうです。例えば、伝統工芸産業協会が開催するコンテストでは、4年連続で入賞しています。

一方で、「ライバルは昨日の自分」とおっしゃっていました。正確により良いものを作ることが前提ですが、昨日よりも早く作り、より多くの人を喜ばせようと、さらなる理想を追求しています。

お客様を大切に

「お客様一人ひとりのこだわりを大切にしたい。」そんな思いから、1点ごとに要望を聞きながら何度も修正を重ねるそうです。その姿が、長年愛される理由ではないでしょうか。



空き缶で如雨露づくりを体験させていただきました!

人を想う気持ちで製品を作る 松山油脂株式会社(東墨田二丁目)



宮下重和さん

杉崎広信 マネージャー

誇りを胸に

松山油脂は1908年に創業。当時は下請けで他社製品を製造していました。自社製品を手掛け始めたのは、現在の社長になってから。自社製品が世の中に広まることで、社員の方が仕事に対して、より誇りをもてるようにとの想いからだそうです。

すみだの利点を活かして

松山油脂をはじめ、昔は区内に石けんの製造会社がたくさんありました。なぜなら、すみだでは革製品づくりが盛んで、その材料の皮からは、石けんの原料となる油が採れたためです。また、すみだは河川による物資の運搬もしやすかったため、多くの会社が集まりました。



工場の敷地には各地に運ばれる製品が。木の裏には、原料の油が入った大きなタンクがあります。



▲70年以上続く釜焚き製法。根岸産業さんと同様に、暑さとの戦いです。

安全で、より良い製品を

松山油脂で大切にしているのは、「肌に安全なこと」「環境にやさしいこと」「使うたびに心地良いこと」の3つのバランスを保った製品。また、近年では、SDGsに対しても取り組んでいます。



工場内には、SDGsに向けた取組が掲示されています。

工場の知られざる工夫

工場では「ラインの切り替え」という数時間に1度の大きな作業があります。1つの部屋で別の製品を作るために、機械の部品を入れ替えることをそう呼びます。これにより、松山油脂では、少量多品種のものづくりを実現しています。同じものを使っても、肌に合う人と合わない人がいます。それぞれの肌に合うような製品を提供する方法の1つが少量多品種のものづくりです。



奥ではラベリング、手前では箱に詰める作業を行っています。

もちろん製造工程にも、たくさんの工夫が詰まっています。

例えば、ラベリングが終わった製品を箱に詰める最後の工程では、ベルトコンベアに段差を作り、そこで製品をわざと倒して転がし、作業が速く進むように工夫しています(写真中央下)。

また、各チームごとに行った改善を、改善レポートとして工場内に貼り出し、情報共有しながら、業務全体の向上を図っています。

ものづくりは人づくり

「ものづくりは人づくり」という言葉があるように、人に喜ばれる製品は誠実な人によって作られます。という話が印象的でした。松山油脂では入社時に、「挨拶」「整理整頓」「人の話を聞く態度」という3つの大切なことを教わるそうです。私たちが工場内を見学した際も、皆さんとても忙しそうでしたが、笑顔で挨拶をしてくださり、とても嬉しかったです。心のこもった製品に、私たち消費者も幸せな気分になりますね。

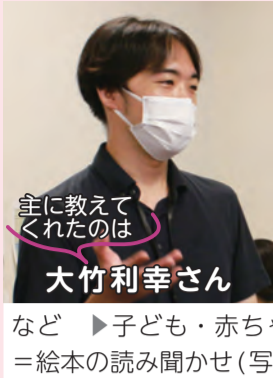


できたての石けん。まだ柔らかかったです。

11月に区内で開催される、ものづくりイベント「スミファ」では、事前申込制で松山油脂さんの工場見学ができるそうです。詳細は、スミファのホームページを見てください!



ひきふね図書館



主に教えてくれたのは

大竹利幸さん

など ▶子ども・赤ちゃん向けのサービス =絵本の読み聞かせ(写真右)など

区内最大の図書館

[住所]京島1-36-5[利用時間]▶月曜日~土曜日=午前9時~午後9時(祝日を除く)▶日曜日・祝日=午前9時~午後5時[来館者数(令和3年度)]延べ43万人(1日で多い時に2000人)[蔵書数]約37万冊[1週間に入荷する本・雑誌]約400冊(部)[様々なサービス]▶障害のある方へのサービス=対面朗読サービス、デジ版の発行(写真左)の発行(写真左)など



り出して、カウンターまで運んでくれます。この機械があることで、貸し出しが円滑になっています。



カウンターの奥には約23万冊

ひきふね図書館の裏側で一番驚いたのは、「自動収納書庫」です。この書庫は、約23万冊収納でき、23区で初めて公立図書館に導入されました。受け付けカウンターの奥には、こんな設備があるのですね。

よく貸し出される本は本棚に並びますが、そうではない本はこの書庫に保管されています。



管理の鍵はICタグ

自動収納書庫で本を管理するために必要なのが、このICタグ。普段借りる本には全て、貸し出しを管理するバーコードに加え、本の保管場所など様々な情報を登録したICタグが付けられています。



本が自動でカウンターに登場!?

自動収納書庫から取り出したい本を、コンピューターで指示。すると、ICタグの情報を頼りに、自動収納書庫の中でクレーンがスライドし、その本が入っているケースを引っ張



り、自動収納書庫の中でクレーンがスライドし、その本が入っているケースを引っ張

実はこんな〇〇があった!?

施設の裏側

チームめろんぱん

公演成功の秘けつ

公演の成功のため、多くのスタッフが舞台の裏側を支えています。各担当者は息を合わせ助け合うため、自分の役割に加え、お互いの役割を理解する必要があるそうです。そんな舞台の裏側の一部をご紹介します。

音響調整室

公演時に欠かせないアナウンス、効果音、BGMなどを流しています。マイク音量の調整や、公演の録画も行います(写真左)。

照明室(ピンルーム)

動く人をスポットライトで照らしながら追っかけていきます(写真右)。

調光室

全体の照明を調整しています。



ひとつの舞台を形に

皆さんが楽しむ公演を開くまでに、たくさんの過程があります。

公演・本番の1か月前(打合せ)

舞台のスタッフさんは、利用者さん(舞台に立つ人)と打合せをします。当日どんなことをしたいのか、人や照明の位置や順序などを話し合いながら仕込みをします。そのままでは対応が難しい要望は、形ややり方を変えて、できるようにするのも大事な仕事の1つだそうです。

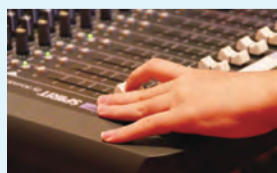
公演当日(準備・リハーサル・本番・片付けなど)

中でも、リハーサルは舞台に立つ人だけでなく、それを支える音響や照明などを担当する人にとっても重要なものです。そして何よりも、お客様の安全に気を配って運営をされているそうです。

貴重な体験をしました!

「朗読劇を公演する」という設定で、舞台を作る体験をさせていただきました。スタッフが照明や幕の開閉などを担当し、私たちが交代で「音響」と「舞台上で朗読をする人」を担当。効果音やBGMを流す音響担当は、朗読に合わせて音源を流したり音量を上げ下げしたりと、舞台上立つのと同じくらい緊張しました。

舞台の裏側は、公演成功の鍵を握るとても重要な役割を担っていることがわかりました。もとは舞台に立つ演奏者だったというスタッフさんもいて、そんな裏側に興味を持って現在に至るそうです。



誇れるホール

[住所]錦糸1-2-3[大ホール]1801席(取材時の8月は照明のケーブルリールやワイヤレス機材の工事を行っていました。公演は、秋から冬にかけて多いため、ホールが空く8月にメン



メンテナンス中の大ホール(8月) [練習室]3室



主に教えてくれたのは

佐藤優介さん

開館は今年でなんと!?

日頃からインターネットなどで手軽に音楽を聞くことができるうえ、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、直接演奏を聴く機会は減っているかと思えます。でも皆さん、今年、すみだトリフォニーホールは開館25周年、同ホールを活動の本拠地とする新日本フィルハーモニー交響楽団は創立50周年という節目の年を迎えます!新日本フィルハーモニー交響楽団50周年の記念公演なども行われます。すみだにある素晴らしいホールで、生の演奏を、ぜひ、聴いてください。



スタッフの皆さんと、めろんぱんポーズ!

すみだトリフォニーホール

